

インド留学記

その3

日本人の インド理解の盲点



東 方 研 究 会 託
研 究 嘱 司
保 坂 俊 司

「インド人くらい我々日本人に理解出来ない国はない」よく、日本人商社マンからきかされた言葉である。実際、よくトラブルがありそれがどうも日本人の方にその原因がある場合が多かった。もつともそれは、日本人の常識となっている価値基準からなされた判断によって、引き起こされるものであって、そのことから即日本人が横暴だとか云うのではない。あえて云えば、インドの常識を知らないために引き起こされるごく些細なことが原因で、それが積もって

不信感につながってしまったと云う場合が多いのである。つまり、一見些細な行き違いの溝は案外に深く、それが導く対立は時として決定的であった。そのために半ばノイローゼとなる人もでるくらいである。それは特に金銭利害の絡む商社マンなどに多く見られたが、頻度の差こそあれ日常生活で私も多く経験させられた。

その具体例をだすまえに、私が留学中大変お世話になったS商事の粕谷支店長の言葉を紹介します。「私は世界中の人間と商売をしてきまし



チャパティと野菜のカレー

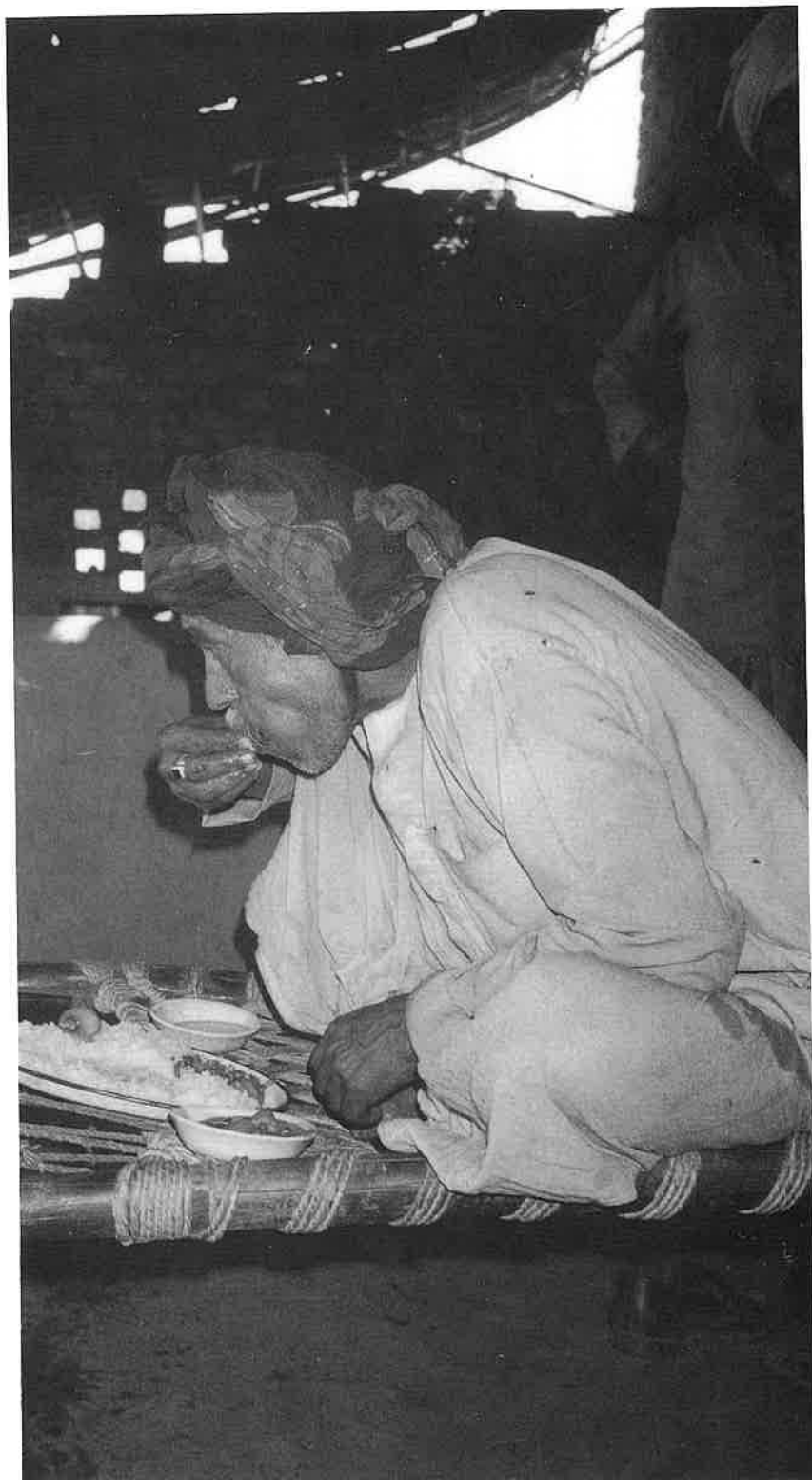
たが、インド人ほど商売のしにくい相手には会ったことがない。どうしてかと考えていたのだが、どうもそれは我々日本人が学んできたヨー

ロッパの常識が通用しないことにあるようだ。勿論我々の常識など通じない場所は、世界中にいくらでもあるが、そういうところはこちら側

に諦めのつくような環境というものがある。例えばアフリカの田舎町とかならこつちだつて覚悟ができてゐるから、諦めのほうがさきに立ち腹はたたない。ところが、一見ただけでは近代国家然としていてその実またく前近代的なところが我々を苛立たせる。それは、例えていえば、水道も無いところで小川の水を飲むことには耐えられても、水道が一応在るにもかかわらず、水が出たり出なかつたり、しかもこの灼熱の地でである。加えて、あなたがた研究者の怠慢である。我々は何処の国についても事前に研究するが、その際にはある程度の基礎知識を得られる虎の巻の様な本が、何処の国についてもあるものだが、ことインドについてはそれがない。インドについて書いてある本はやまほどあるが、ほとんどは御釈迦様の生誕の地、あるいは仏教の発祥の地といった画的なものであつて、現実に生きるインドを紹介したものがほ

とんどない。だからよけいに、我々は苦勞するのではないかとおもう」まったく耳のいたい言葉であるが、その通りであると思つた。なぜなら私自身が最初の旅行でうけたショックの大きかつたことといつたらなかつた。空港に降りたとたん引き返そうかと思つたほどであつた。それまで随分インドについては勉強したつもりであつたが、それらはまったく現実のインドを語つてくれていなかつた。そして、私の知識もまったく見当外れなものだつた。それが現実であつた。そしてさらに粕谷氏は、どうしてあれほど研究者がいるのにインドの現代についてのまともな入門書一つないのだろうか」と畳みかけてくる。日本の繁栄を支える商社マンらしい鋭い指摘であつて、わたしはただただ恐縮するばかりであつた。

そう指摘されると、確かに思い当たることがある。日本の多くのインド学者といわれる先生



の多くは仏教学者で、しかもインド嫌いやインドに一度も足を踏み入れたことのない先生もいるときく。加えて仏教はインドでは実質七百年前に滅び、今あるのはただの遺跡、それも人の住まない荒野にばかりその多くはある。こんな状態だから「インドは良い国だが、インド人がいなければもつといいのだが」などと冗談混じりでおっしゃる方が結構多い。したがって、今日のインドなどに興味を示す先生の数はけっしておおくない。もつともそれも近年漸く方向が変わってきてはいる。いうなれば、現代インドをその長い歴史の線上で理解しようとする試みは、われわれの様なインドで学ぶ事のできた世代に託された課題ということになる。少くともわたしは、粕谷氏の指摘でそう決心した。

そう考えだすと、いろいろなものがことごとく興味の対象となってくる。特に、生きたイン

ドを研究対象とする私にとって、この指摘は千金の値があった。

日常生活のインド

確かに、日常生活は、いろいろのお経の文句にあるような清らかですごしやすい理想郷とは違って楽ではなかった。四十四五度の気温もさることながら、湿度九十パーセント以上という蒸し暑さには些か閉口した。座っていても汗が背中をスーと流れ落ちる、その気色悪さといつたら例えようがない。眠れぬ夜が幾日もつづく、勿論夜昼の区別もないのである。慣れるまでには、相当の時間が必要だった。もつとも慣れてしまえば大した苦ではない。ただ始めのうちには水が飲めなかつたので往生した。つまり、生水は腹をこわすし、肝炎などの伝染病になるのとことと飲まぬのが常識なのである。しかし、そ

うは云つても一週間や十日ならいざしらず、何年も滞在しようとする人間がそんなことでは先が思いやられる、病氣になつたつて死にはすまい、インド人は皆おいしそうに飲んでいて、「はいか」 そう腹をきめると、今までの心配は払拭されて、冷たい水のおいしさを思う存分味わえた。水くみ場に並んでいると、寮生が親しうに声をかけてきてくれる。今まで何とはなしに他人行儀だつた連中がである。まさに郷に行けば郷にしたがえである。

幸いにして腹をこわすこともなく、私の寮生活は順調にはじまつた。

学生の生活は、六時半の朝食の合図ではじまる。カンカンと鐘が打ち鳴らされると総勢二百人の寮生が、ぞろぞろと食堂に集合する。食堂は菜食主義者と非菜食主義者とは別である。私は毎日出る卵焼きを食べるために非菜食主義者の席につくことを常としたが、時々菜食主義の

席に回り彼らと食事を伴にした。両者の往来はごく自由で、頑な印象は受けなかった。しかし、中には肉を生まれてこの方食べた事のない人も多く、彼らの厳格さには感心させられた。しかし決して、苦行しているといった感じではなく、むしろ菜食主義者のほうが、旨いものを食べているようにも思えた。やはり歴史と伝統のなせる技であろう。メニューは毎日替わり朝食には、不満はなかった。ただ、牛乳はどうも水で薄めるらしく妙に薄味であつた。それは時間が遅くなればなるほど顕著であつた。(つづく)